

リネゾリドおよびバンコマイシン投与による血小板減少と腎機能障害発現についての検討

¹札幌医科大学附属病院 薬剤部、²札幌医科大学 医学部 泌尿器科

○藤居 賢¹、國本 雄介¹、高橋 聡²

【目的】MRSA や多剤耐性グラム陽性球菌感染症治療に使用されるリネゾリド（以下、LZD）およびバンコマイシン（以下、VCM）の代表的な有害事象として、LZD には血小板減少、VCM には腎機能障害が知られている。札幌医科大学附属病院におけるこれら抗菌薬について後向きに調査を行い、有害事象の観点から抗菌薬の適正使用について検討した。

【方法】2011年1月～2011年12月までにLZDおよびVCMの注射薬を投与された入院患者を対象とした。血小板減少は、対象薬剤投与中もしくは投与終了後に血小板数が投与前の30%以上減少した群を血小板減少群として評価した。腎機能の評価は、日本腎臓学会のChronic kidney disease病期ステージの分類を用い、対象薬剤投与終了後の推算GFR（eGFR）のステージ悪化群を腎機能低下群とした。

【結果】血小板減少調査においてLZD投与群91例中48例（53%）、VCM投与群161例中49例（30%）に血小板減少が認められ、LZD投与群において有意に血小板減少が認められた（ $P < 0.05$ ）。また、腎機能低下調査においてLZD投与群121例中16例（13%）、VCM投与群167例中39例（23%）に腎機能低下が認められたが、両群間の発生頻度に有意な差は認められなかった（ $P = 0.07$ ）。

【考察】感染症患者において全身状態の悪化から血小板減少低下や腎機能障害が引き起こされることがある。本研究結果よりLZD投与群はVCM投与群に比べ、有意に血小板減少を引き起こすことが推察され、LZD投与時には早期からの血小板数のモニタリングが重要であることが示唆された。また、VCM投与群はLZD投与群と比べ有意ではないが腎機能低下症例が多い傾向が認められ、VCM投与時における腎機能のモニタリングとTDMを今後も継続して行う必要がある。非学会員共同演者：牧野 新輝、岡崎 正子、中田 浩雅、野田 師正、宮本 篤；札幌医科大学附属病院 薬剤部

リネゾリド投与症例における血小板減少症と腎機能低下、及び投与期間に関する後方視的検討

¹青森県立中央病院 薬剤部、²青森県立中央病院 感染対策チーム

○平野 龍一¹、坂本 勇一²

【背景】リネゾリドはメチシリン耐性黄色ブドウ球菌やバンコマイシン耐性腸球菌を含め多くのグラム陽性菌に活性を有する抗菌薬である。重篤な副作用として血小板減少症が知られているが、そのリスク因子は不明である。【目的】リネゾリド投与後の血小板減少症と腎機能低下の有無及び投与期間の大小との関連性を検討する。【方法】平成22年1月から平成24年5月までに当院でリネゾリドが投与された成人患者74例を対象とした。投与前の血小板値から30%以上の低下もしくは $10 \times 10^4/\mu\text{L}$ 以上の低下を血小板減少症と定義した。腎機能の指標として推算糸球体濾過量（eGFR）を用い、50 mL/min/1.73m²未満を腎機能低下群とした。なお統計解析は χ^2 検定を用いてオッズ比（OR）を計算し有意差の有無を判定した。【結果】血小板減少症の発生率は腎機能正常群24%（10/42）、腎機能低下群56%（18/32）となり、血小板減少症に対する腎機能低下のORは4.1倍であった（95%CI；1.5–11.1）。投与期間については投与14日未満の群における血小板減少症は腎機能正常群12%（3/25）、腎機能低下群38%（8/21）となり腎機能低下はOR4.8倍となった（95%CI；1.0–21.9）。投与14日以上群においては腎機能正常群41%（7/17）、腎機能低下群91%（10/11）となり腎機能低下はOR14.3倍であり（95%CI；1.47–138.4）、投与期間14日以上が血小板減少症の発生に対してOR3倍であった。【考察】腎機能正常群における血小板減少症の発生率は臨床試験時の発生率と同様であった。しかし腎機能低下群では臨床試験の約3倍の発生率となった。リネゾリド投与14日以上の場合、血小板減少症の発生率が高率であった。本検討よりリネゾリドによって血小板減少症が生じるリスク因子として腎機能低下と14日以上投与期間が示唆された。リスクの高い患者には血小板値の定期的モニタリングが必要であると考えられた。